

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K01073

研究課題名(和文) 五条坂の窯業考古学的研究-多様性と「伝統」の現在-

研究課題名(英文) Ceramic Archaeological Study of Gojozaka -Diversity and "Tradition" Today

研究代表者

木立 雅朗 (KIDACHI, Masaaki)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40278487

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：SfM-MVS技術を用いて4つの京式登り窯の計測を行い、詳細な記録を作成した。通常は入ることができない胴木間や煙室を含めた窯の内部についても記録を残すことができ、その計測方法についてノウハウを蓄積した。また、石黒宗磨窯・道仙化学製陶所について民俗考古学・建築学的検討を行い、道仙化学製陶所他の近現代文書の調査とデジタル・アーカイブ、一般の陶工・桐箱職人へのオーラル・ヒストリー調査、五条坂の京焼関係者への悉皆調査を行ない、登り窯を中心とした人々の動態を多様な史資料を用いて明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インバウンドの影響で京焼の伝統的産地・五条坂は外国人ホテル街へと急速に変化し、登り窯だけでなく、長屋や町家の片隅に残されていた多様な道具類も急速に失われていった。住民も少なくなった。コロナ後も余談を許さない。その危機感から登り窯と人々の記憶を詳細に記録する必要に迫られていた。本研究の記録は産業遺産の修復や維持管理の資源としても重要な役割を果たすが、なによりも、人々の記憶を遺跡や史資料と結びつけることによって、地域住民や京焼関係者が地域や産業を見直し、今後の街づくりに活かす基礎資料として活用できる材料を提供できる。その上であれば、良質な観光資源として活用することもできるだろう。

研究成果の概要(英文)：Four Kyo-style climbing kilns were measured using SfM-MVS technology, and detailed records were made. We were also able to record the inside of the kilns, including the Dogi-ma and the smoke chamber, which are usually inaccessible, and accumulated know-how on the measurement method. In addition, ethno-archaeological and architectural studies were conducted on the Ishiguro Munemaro Kiln and Dosen Chemical Pottery, a survey and digital archive of Dosen Chemical Pottery and other modern and contemporary documents, an oral history survey of ordinary potters and paulownia box makers, and a comprehensive survey of people involved with Kyoto pottery on Gojozaka, to reveal the dynamics of people around the climbing kiln. The study used a variety of historical materials to clarify the dynamics of the people who lived around the climbing kilns.

研究分野：民俗考古学

キーワード：五条坂 京焼清水焼 登り窯 三次元計測(SfM-MVS) 職人長屋 オーラル・ヒストリー

## 1. 研究開始当初の背景

現在「京焼(清水焼)」と総称される京都市周辺の陶磁器製造は、近世に始まる手工業の延長線上に、明治期以降は「在来型」産業(尾高 2000)として欧米由来の知識・技術を取りこみながら発展、近代化してきた都市型の工芸である。とくに五条坂・清水坂周辺は、生産・流通に携わる製造・卸・小売の各業者が軒を並べ、裏通りには陶磁器に関連する箱・組紐作り職人の家が点在するなど、さまざまな資本が集積してきた希にみる産地といえる。一方、京焼をめぐる研究は数多いものの、由緒ある作者の伝記的記述や、美術史・陶芸史的な視点、あるいは地場産業史的な著作物が主であり、「都市社会(民俗)」のなかでの高級工芸としての特徴と関係者の生活戦略を関連づける研究や、共同分担者の木立雅朗が実証した工業化により理化学陶磁器や軍事製品をも生産した「近代産業」としての「京焼」を対象とした研究は、極めて少ない。加えて京都は、建造物や人的関係を根底から破壊する戦禍をほぼ免れ、職住一体の特性から住民が地域内に居住を続け、町内会などの中間集団の紐帯が弱体化しにくい場所とされてきたが、五条坂では近年の観光ホテル開発などにより古い住民の転出・空洞化が著しく、関係者から「五条坂はもう終わった」の声すら聞かれる。京焼に限ったことではないが、京都全体の伝統的工芸の衰退と地域社会の解体が進むこのタイミングだからこそ、真摯で主体的な取り組みが始まった五条坂の町おこし運動ともリンクしうるように、地域社会の軸となってきた「京焼」をめぐる「産業民俗」「都市民俗」を悉皆的な記録保存をめざす調査は、近代の「京都」および「職人社会」を理解する視座からも、重要かつ喫緊の研究課題と考えられる。

2018年当時、インバウンドなどの影響で五条坂は京焼清水焼の街から清水寺の麓の外国人ホテル街に急速に姿を変えつつあった。町家の奥に残された登り窯や民具・文書類などの多くの文化遺産が危機的な状況にあった。観光客の急激な増加は住民の生活を圧迫し、文化遺産を代々育ててきた人々が暮らせない街に変容しつつあった。急速に失われつつある文化遺産の正確な記録を作成し、資料の保全を行なう必要が高かった。陶芸の街として持続してゆくためには、研究成果を町おこしに活用し、文化遺産を育ててきた地域住民の生活全般を明らかにする必要性が高いと考えた。近現代考古学・民俗考古学の果たす役割は大きい、それだけではどうしても不足する。そのため、精密な記録を残しつつ、建築史なども含めた、より総合的な研究が求められていた。

## 2. 研究の目的

本研究は、西陣織や京扇子などに比して知られてこなかった「京焼」の現場を記述・分析するための基礎作業・基盤形成である。具体的には、各種陶磁器の生産様態、陶工社会の分業・雇用と階層構造、関連業種の集積状況と生産者/問屋の力関係、職住一体の空間形成の過程とその生活文化などの経時的な変化と現状を、関係者からの聞き取りと現地観察・史資料調査によって記録し、個々人の生活実感に焦点をあてた民俗誌的データとして蓄積を図りながら、近代の「産業民俗」「都市民俗」研究の視座を深化させることを目的とする。地場産業のフィールド調査とまとめれば、それほど独自の創造性をもたないように見えるかもしれない。しかしながら管見によると「京都」は、その規模や生活文化の充実度に比して「民俗」の調査研究例が数少ない都市である。市は歴史・考古資料館を設置するが、民俗資料館を持たない。府は京都文化博物館を擁するが、総合展示テーマは歴史、祭り、美術工芸である。近代まで政治・経済・文化の中心であったからか、「京都で研究」は、天下国家の歴史、権力者・富裕層を母体とする高級芸術や文化・風俗を対象とする傾向が強い。もちろん民俗調査もあり、社会学・民俗学は、祇園祭や五山送り火などの祭礼・伝統行事を中心に、中心部の個別町や富裕層京町家の生活、花街習俗などに注目してきた。とはいえ、比較的にありふれた各種生業・産業に注目し、その実践を丹念にたどる調査は散発的であった。京都の「伝統産業」の規模が大きく調査しにくい/まとめづらいという理由(e.g. 藪内清編 1955)もあるが、「京都で」なにを対象とするか、富や権力から離れた人々の営みに向いていたか、という研究者の「まなざし」が問われなければならない。本研究は、著名作家や「窯持ち(登り窯所有者)」ではなく、賃仕事の陶工やロージ裏の工房に主眼を置くこと自体で、「京都研究」としてのユニークさを持つ。第2のオリジナリティは、京焼を「伝統産業」ではなく「近代産業」として捉え、従来の「職人・職人社会」像では捉え切れない営みを捉えようとする点である。日本民俗学では近年「近代産業」研究(e.g. 三田村佳子 1998、宇田哲雄 2008、中島順子 2017)が蓄積されるようになり、本研究もその流れに位置づけられる。一方、近代以降の技術革新で急発展した鋳物工場などに比して、数名~十数名で構成される工房主体の京焼「社会」には、独特の慣行がみられた。例えば、登り窯の一室や室内の棚一枚分を借りて製品を焼く「借り窯」慣行が成立し、職工・徒弟が零細な製造家となることを可能にした。とくに日吉地区では、戦前の京都最大と呼ばれる労働争議が起きるなど、強い独立の気風があった。第3のオリジナリティは、京焼の「消費地型」立地に注目し、五条坂に集積する関連商工・サービス業がコミュニティを形成する「産業地域社会」(宇田 2014)のなかで醸成された有形無形の

文化事象、「都市民俗」を捉えようとするものである。陶磁器産業は瀬戸などの「原料産地型」が原則であるなか、五条坂は、土も少なく薪燃料の入手に不便であるにも関わらず、産業が集積した。その理由は、茶陶や食器、床飾りなどの嗜好品・奢侈品への細かい需要に応じる「多品種少量生産」システムが成立し、都市富裕層の社交・流行に応じた結果である。近代以降も茶道・華道のほか、京都観光の土産物・和食料亭の食器など、その需要はすぐれて都市的であり続け、五条坂独自の内的ネットワークが形成された。第4のオリジナリティは、「京焼」を支えた空間、通り・表の京町家・裏の長屋・工房・登り窯などをつなぐロージに注目し、土や燃料、商品の出入り、その収納や展示など、物流ネットワークが全体となって、どのように地域社会の基盤を形成したか、都市空間に、建築的視点から新たな歴史的考察を加えようとするものである。都市部の庶民住宅と生活様式については、西山卯三により主に間取り研究の視点から調査され、戦後の労働者住宅の典型として研究されたが、仕事と融合した住まい方（職住混合・近接）や、コミュニティの人々が形成する地域空間、多様な建築・設備が重なり合う都市空間と社会背景の分析は不十分で、都市史、建築史、都市民俗学上、重要な意義を持つであろう。

### 3. 研究の方法

本研究は、近代の「産業民俗」「都市民俗」を鍵概念として、陶工・小売業・問屋業・関連製造業およびの関係者・家族への聞き取りを中心とする観察調査を行い、とくに生産様態・空間(建築)に関しては、各種機材や外部の専門職を活用した測量・映像記録を含む資料作成を併用する。また、古い住民の家に残る種々の史資料の収集・分析し、歴史的変容の立証も視野に入れる。その際、文化人類学・民俗考古学・建築学など多様な方法論を背景とする研究者の共同と討議により、記録保存を主眼とするテーマであっても、暮らしや仕事の振る舞いを示す身体やものの状態を合わせて調査することで、単なる聞き取りや静態的資料にとどまらない、生きられた空間として総合的に描写することをめざす。調査フィールドは、おおむね京都市東山区内の五条坂・清水坂とその周辺街区とする。

生産に関わる調査として、考古学・民俗学・文献史学の方法を駆使し、登り窯の3D測量をはじめとした記録作成、陶工の聞き取り調査、文献史料調査を行う。五条坂の「製造・卸し・小売り」の実態と運営について、流通システムに関わる聞き取り調査・文献資料調査などを行い、流通の実態についてもまとめたい。藤平陶芸文書をはじめとした近現代文書には製造だけでなく、卸しに関わる文書が含まれており、それを含めた文献記録のさらなる掘り起こしと検討も目的とする。

なお、3D測量については、近年一般化してきたSfM-MVSの技術を用いる。解析にはAgisoft社製Metashape Professional版を使用する。登り窯の3D計測については実践例が少なく、未開拓であるため、SfM-MVSの有効性や問題点を明確にする。

近年になって注目され検討されはじめた窯業関係の近現代文書(帳簿類)のデジタル化を進め、あわせて関係者への聞き取り調査を行い、その解釈を進めた。コロナ禍のため、京都から転出した方々に対する聞き取りを充分に行なうことができなかったが、桐箱職人、陶工(轆轤師・絵付け師)をはじめとする複数の職種から聞き取り調査を行なうことができた。

また、登り窯の周囲の工房・住居の建築学的な検討を行なうことで、従来にはなかったアプローチを試みた。

### 4. 研究成果

#### (1)登り窯の計測

石黒宗磨窯・上田恒次窯・河井寛次郎窯・五条坂京焼登り窯(旧藤平)の5つの登り窯について、SfM-MVS技術を用いた計測を行ない、報告した。このほか、修復工事の都合で途中になっている小川文斎窯の計測を行なった。上田恒次窯・五条坂京焼登り窯(旧藤平)は煙突をもつ登り窯であり、それ以外は煙突を持たない「吹き出し」の窯であった。京焼登り窯の伝統的型式は「吹き出し」だが、近代以降に導入された煙突について、構造的な検討は行なわれてこなかった。計測のために内部に立ち入り詳細に観察し記録した結果、煙突手前に炎の流れを管理・抑制する構造が確認された。登り窯の煙突は近代以降に出現しながらも、多くの人々にとっては焼き物の街の象徴として意識されてきたが、その構造については等閑視されてきた。詳細な計測と関連調査によって、煙突の象徴性について総体的に位置づけることができた。また、上田恒次窯では一部の部屋の狭間穴構造が瀬戸・美濃と同じ縦狭間穴構想をとっており、通常の京式登り窯とは異なっていることが判明した。この構造は、かつて吉田邦夫が指摘していた京式登り窯の新たに工夫として紹介していたが、はじめてその具体例を見出すことができた。上田恒次の師匠に当たる河井寛次郎窯も含めて現存する京式登り窯ではそのような構造は確認できない。小型窯ゆえの改変の可能性もあるが、同じ小型窯である石黒宗磨窯ではそのような工夫を行っていないため、陶器を中心にした石黒、磁器を中心にした上田との違いである可能性が想定される。これらの計測により、登り窯の撮影・測量方法について一定のノウハウを培うことができた。

#### (2)生活空間の分析-石黒窯と道仙化学製陶所の職人長屋-

### 石黒宗磨窯・工房・邸宅の民俗考古学的視点、建築学的視点からの検討

人間国宝・石黒宗磨の窯と工房・邸宅の建築学的な調査は、個性的な陶工に関わる調査だが、京焼登り窯と陶工の生活について教えてくれる貴重な調査となった。工房と邸宅は良好な形で残されていたが、登り窯・上絵窯・黒楽窯は廃墟化していたが、(1)の業績によって詳細に検討を加えることができた。残された登り窯と射水市博物館が所蔵する写真・文書などの関連資料の比較検討により、石黒窯の改造の履歴を詳細に復原することができた。考古資・建築資料にとどまらない多様な史資料は京焼清水焼の調査研究をより立体的に補ってくれた。他の地域から集まってきた陶工が修行を積み、中には人間国宝にまで発展するさまを遺構・遺物で具体的に示すことができた。

道仙化学製陶所長屋とロージの成立と性格についての窯業史・民俗考古学的視点、建築学的視点からの検討

石黒宗磨邸の研究とは対照的だが、道仙化学製陶所の職人長屋の民俗考古学的・建築学的調査では、かつての職人長屋の構造を具体的に調査し、記録することができた。京町家の建築学的研究は進んでいるが、この職人長屋の調査を進めるうち、長屋の研究がほとんど行なわれていないことが明らかになった。結果として、黒石いずみ・金田正夫が行なった道仙化学製陶所長屋の調査研究は、京都の町家研究のなかで、はじめての本格的な長屋調査の事例となった。余語琢磨は早くに工場に転用された平屋長屋の類例を文献資料から説き起こし、聞き取り調査を加えることで、職人長屋に住む人々・工房・登り窯・ロージの変遷について明らかにした。ロージは登り窯・工房への通路であり、職人長屋に住む人々の生活道路でもあった。ロージと登り窯をめぐる具体的な生産・生活の実態を多様な資料から明らかにすることができた。

### (3)近現代文書の調査とデジタル・アーカイブ

道仙化学製陶所が保管していた多量の近現代文書類は帳簿類・行政文書類を含んだ雑多な資料だが、それらのデジタル・アーカイブを進め、整理を行なった結果、(2)で行なった民俗考古学的・建築学的な研究成果をより立体的に描くことができた。このような近現代文書から生産の実態に迫ることができたこと、それが民俗考古学・建築学研究とも連動しうることを示すことができた。また、浅見五郎助家文書、小川文斎家文書もあわせてデジタル・アーカイブを進めたところ、両家ともに長く町内会長を務めていたため、町内会関係の文書類が含まれていることを確認した。町内会文書の中には多様な行政文書が含まれ、明治以降大正期に至る戸籍、幕末以降の地券類が含まれていた。これによって、五條橋東4丁目の家々の所有者と住民、宅地の利用状況などを詳細に明らかにすることができた。残された文書は多く、今後とも増加する可能性が高い。すでに町内会資料を用いて詳細な検討がなされつつあり、今回発見した町内会文書は地域史研究にとって注目されはじめている。極めて良好な文書群であり、今後とも継続した調査研究を行なってゆく予定である。

### (4)五条坂のオーラル・ヒストリー

五条坂に関するオーラル・ヒストリーは優秀なものがいくつかある。しかし、そのほとんどは著名な業界人であり、通常の職人に対するオーラル・ヒストリーは陶工・岩國起久雄が自ら記述した事例以外、ほとんど存在しない。そのため、余語琢磨と木立雅朗は、ロージの奥で仕事をすする陶工・絵師・桐箱職人に対する聞き取り調査を行った。「著名な陶工が語る五条坂」ではない、一般の職人たちから見た視点は新たな視点をいくつも提供した。清水焼を題材とした小説も重要な資料として再評価したが、とくに注目すべき点は、従来は注目されてこなかった封建的な姿を浮き彫りにできたことである。また、余語琢磨は五条坂の陶磁器業関係者に悉皆調査を行い、町全体の生産の変遷を明らかにした。さらに、聞き取りと史資料の両面から登り窯の築造と廃絶についてはじめて具体的に明らかにするとともに、聞き取り調査をきっかけとして、新たな史資料の掘り起こしも行なった。従来の京焼研究とは全く異なる社会学的な調査は五条坂の歴史的イメージを新たにするものであった。

(1)～(4)の研究によって京焼登り窯を中心とした遺跡と、工房・長屋を中心とした建築物、町家の片隅に残されていた近現代文書、住民の記憶を結びつけ、身近で立体的な歴史イメージを構築することができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木立雅朗	4. 巻 1
2. 論文標題 京式登り窯の築造・修復・改造	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 やきもの つくる・うごく・つかう	6. 最初と最後の頁 70-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木立雅朗	4. 巻 41
2. 論文標題 伝統工芸の道具類の保存と活用 - 京焼登り窯を中心に -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館史学	6. 最初と最後の頁 121-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 余語琢磨	4. 巻 38
2. 論文標題 石黒宗磨と”京窯” - 京都蛇ヶ谷・八瀬における創作活動と生活 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 生活学論叢	6. 最初と最後の頁 56-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木立雅朗	4. 巻 洛東編
2. 論文標題 登り窯の終焉と記憶をめぐる文化資源-五条坂・道仙化学製陶所の民俗考古学-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 令和元年度 京都府域の文化資源に関する共同研究会報告書(洛東編)	6. 最初と最後の頁 89-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木立雅朗	4. 巻 洛東編
2. 論文標題 登り窯の受難-清水焼と五条坂の戦中戦後-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都を学ぶ	6. 最初と最後の頁 205-229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木立雅朗	4. 巻 997
2. 論文標題 大学・考古学・埋蔵文化財行政-近現代考古学がつなぐ社会-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 14-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠藤マリア・余語琢磨・木立雅朗	4. 巻 4
2. 論文標題 胎土分析の目的と方法の研究的再検討-学問の伝統と一般性をめぐる紙上鼎談-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 窯跡研究	6. 最初と最後の頁 67-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木立雅朗	4. 巻 69-4
2. 論文標題 「京都学」は成立するか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地方史研究	6. 最初と最後の頁 53-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木立雅朗	4. 巻 108
2. 論文標題 五条坂の地域史と研究の隙間	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鴨東通信	6. 最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 木立雅朗
2. 発表標題 モノを通じて見た地域の歴史 - 伝統工芸から見た京都の現在・過去・未来 -
3. 学会等名 文化的景観研究集会第10回 風景の足跡 - 考古学からの文化的景観再考 - (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木立雅朗
2. 発表標題 民俗資料の保存と活用について - 窯業と染織 -
3. 学会等名 シンポジウム 近代京都産業遺産の保存と活用 (近代京都産業遺産研究会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木立雅朗
2. 発表標題 五条坂の今昔と考古学 - 京焼登り窯発掘調査の歩み -
3. 学会等名 令和2年度京都市埋蔵文化財研究所文化財講演会 五条坂の登り窯 - 京焼 今むかし -
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 余語琢磨
2. 発表標題 五条坂の工房と登り窯を歩く-語りと写真測量から考える京焼今昔-
3. 学会等名 令和2年度京都市埋蔵文化財研究所文化財講演会 五条坂の登り窯 - 京焼 今むかし -
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 黒石いずみ・金田正夫
2. 発表標題 京都五条坂北側・道仙路地の研究(2) - 建築学的視点からみた「ロージ」の成立と性格 -
3. 学会等名 日本生活学会第47回研究発表大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 余語琢磨
2. 発表標題 京都五条坂北側・道仙路地の研究(1) - 窯業史・民俗考古学的視点からみた「ロージ」の成立と性格 -
3. 学会等名 日本生活学会第47回研究発表大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 余語琢磨
2. 発表標題 都市工芸・京焼の民俗誌的記述にむけて - 伝統工芸と近代産業のはざままで -
3. 学会等名 日本民俗学会第73回年会 横浜 「海が結ぶ日本と世界」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 余語琢磨
2. 発表標題 「コロナ不況」にゆらぐ伝統工芸と観光地 - 京焼および京都五条坂を事例として -
3. 学会等名 日本生活学会第48回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木立雅朗
2. 発表標題 京焼登り窯の民俗考古学的研究
3. 学会等名 立命館大学アート・リサーチセンター『日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点』プロジェクト 成果報告 2021年度成果発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 ナワビ矢麻・余語琢磨・田畑幸嗣・木立雅朗
2. 発表標題 京焼登り窯の三次元計測 - 河井寛次郎窯の事例 -
3. 学会等名 日本文化財科学会第38回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ナワビ矢麻・余語琢磨・田畑幸嗣・木立雅朗
2. 発表標題 京焼登り窯の三次元測量 - 上田恒次窯の事例 -
3. 学会等名 日本文化財科学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ナワビ矢麻・木立雅朗・余語琢磨・田畑幸嗣
2. 発表標題 京焼登り窯の三次元計測 -石黒宗麿窯の事例
3. 学会等名 日本文化財科学会第36回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木立雅朗・藤川香
2. 発表標題 茶を点てる-茶陶の使用痕と茶道-
3. 学会等名 日本文化財科学会第36回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木立雅朗
2. 発表標題 近現代考古学と京都について-地場産業・伝統産業と埋蔵文化財の関わり-
3. 学会等名 令和元年度 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木立雅朗
2. 発表標題 陶磁器と社会-京焼登り窯の発掘調査から見たファインセラミックへの道のり-
3. 学会等名 第32回ファインセラミックス関連団体交流協議会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木立雅朗
2. 発表標題 京焼・清水焼の民俗考古学的研究-五条坂を中心として-
3. 学会等名 洛東の文化資源共同研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 余語琢磨
2. 発表標題 京都八瀬・石黒宗麿の作陶の場の研究 (1)
3. 学会等名 第46回日本生活学会研究発表大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒石いずみ
2. 発表標題 京都八瀬・石黒宗麿の作陶の場の研究 (2)
3. 学会等名 第46回日本生活学会研究発表大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	余語 琢磨  (YOGO Takuma)  (00288052)	早稲田大学・人間科学学術院・准教授   (32689)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	ナワビ アハマッド矢麻  (NAWABI AhamadoYAMA)  (60802882)	早稲田大学・會津八一記念博物館・助手    (32689)	
研究 分 担 者	田畑 幸嗣  (TABATA Yuki tugu)  (60513546)	早稲田大学・文学学術院・教授    (32689)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協 力 者	黒石 いずみ  (KUROISHI Izumi)  (70341881)	青山学院大学・総合文化政策学部・教授    (32601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関